

楊振声「荒島上的故事」における自死する少女

杉村 安幾子

1. 序

中国五四時期の作家楊振声（1890-1956）は、その作家としての業績よりも、清華大学文学院院長や国立青島大学初代校長などを歴任したことで教育および教育行政における能力への評価が高い¹⁾。それは楊の教え子であった作家蕭乾（1910-1999）が「彼の残した作品は多くない。というのは、彼の一生の主要な貢献は人材を育成する教育事業にあったからだ」と回想する通りである²⁾。

専業作家がまだ珍しかった民国期中国においては、小説や詩歌などの作品を発表した文人の多くが教員や出版関係などの職にあった。楊もその一人であり、日本においては楊の国立青島大学校長時代に焦点を当てた研究に優れたものがある³⁾。中国本国で近年刊行された『楊振声研究資料選編』（李宗剛・謝慧聰選編、山東人民出版社、2016年）は楊振声研究の現時点での網羅的集大成であるが、教育・教育行政面の検証および評価についての論稿を多く収録しており、創作業績については代表作にして唯一の中篇小説『玉君』（1925）についての論稿が中心となっている。1925年の刊行当時に『玉君』評が集中的に世に送られ⁴⁾、その10年後に魯迅（1881-1936）が文芸評の中で『玉君』を取り上げ、楊振声については「極力人民の間の苦しみを描写しようと努めた⁵⁾と評したことによって、作家としての楊振声イコール『玉君』の作者という構図が定着している。

とは言うものの、楊の短篇小説群が顧みるに値しない作品群というわけでは決してない。現に時代の文脈の中に作品を置き直してみると、楊振声の創作の意図や問題意識などが浮き彫りとなり、それらが執筆当時の中国の社会的状況と密接に関わっているのが明らかとなる。例えば1920年に発表された「貞女」⁶⁾は、冥婚という奇習と民国期に到っても尚女性のみに求められた貞節を批判的に描き出し、恋愛や結婚の自由に代表される人間性の解放が叫ばれた五四新文化運動の1ページになっている。また「阿蘭の母親（阿蘭の母親）」（1926）は1926年3月18日に北京で起きた三一八事件を背景として、娘を喪った母親の悲痛を、「済南城上（済南の町で）」（1928）は1928年5月3日、山東省済南における日本軍対中国軍の交戦であった済南事件を背景として、砲火に身を投じた兄弟を描いた⁷⁾。そもそも代表作である『玉君』が刊行当時に多くの反響を得たのも、旧式な封建的婚姻制度の被害者たるヒロイン玉君を、彼女を秘かに愛しつつもフランス留学に送り出す主人公の青年に、五四新文化運動の理想が見出されていたからに他ならない⁸⁾。楊の作品群はまさに時代を映す鏡として、現在も尚、五四時期の輝きを伝えていると言ってよい。

本稿は楊の「荒島上の故事（無人島の物語）」（1943）を取り上げ、主要登場人物である少女の自死という行為に光を当てて論じるものである⁹⁾。結論を若干先取りすれば、「荒島上の故事」は、少女が自死を選ばざるを得なかったという点で「貞女」との共通点を指摘できるが、「貞女」とは大きく異なる少女像を見出すことができる。それは同時に、中国国内に沸き上がっていた民族意識の高まりにもつながる時代の貌でもあった。

2. 「荒島上の故事」——回想の中の日本兵

楊の「荒島上の故事」は1943年5月25日に『世界学生』月刊第2巻第5期文芸専号（文芸特集号）に発表された。この時期、楊は西南聯合大学国文系の教授として雲南省昆明にいた¹⁰⁾。西南聯合大学とは、北京にあった国立の北京大学と清華大学、天津にあった私立の南開大学の三大学が、1938年から1946年に戦火を避けて昆明に疎開し、合同で設立した大学である。当時にして名門の三大学が連合したことで、昆明は著名な文人・作家・学者が集結して一大文化地帯となっていた。

掲載誌の『世界学生』は楊振声と李広田（1906-1968）¹¹⁾を主編とし、1942年に創刊された政治、経済、文化に関する論稿を掲載した総合雑誌である。第2巻第7期を刊行後、一旦停刊、復刊後の第3巻からは文芸的な性質を全面に出すこととし、『世界文芸』月刊に改称した。更に1945年には掲載篇数を増やして月刊から季刊に変更、上海の商務院書館から刊行された。寄稿者は卞之琳、馮至、聞家駟、李何林など、西南聯合大学関係者か、或いは当時雲南の大学で教鞭を執っていた文人や作家たちであった。楊はこの『世界学生』に「学生和世界和平（学生と世界平和）」（第1巻第7期、1942年7月）、「幾句關於文芸欄的話（文芸欄に関する些かの話）」（第1巻第10期、1942年10月）、「詩歌與凶画（詩と絵画）」（第2巻第4期、1943年4月）、『世界文芸』季刊には「黄果」（第1巻第3期、1946年4月）と「伝記文学的岐途（伝記文学の岐路）」（第1巻第4期、1946年11月）を発表した。また、『世界学生』第2巻第5期に掲載されている小説は楊の「荒島上の故事」のみであるが、聞一多と李広田が論文を、馮至が散文を寄せている¹²⁾。

「荒島上の故事」の概要は以下の通りである。抗日戦争の気運の高まる山東と思しき地方の島嶼部。島の漁民たちの間でも愛国の炎が燃えていた。敵兵は漁民から舟を奪い、近隣で肅清という名の略奪・残虐行為を行なっている。漁師の若者武誠も、5年間働いてやっと手にした新しい舟を敵兵に奪われ、武誠自身は水手として敵に良いように使われる日々を送っている。

ある日、荒れた小さな無人島で敵兵は一人の少女を見つけ出す。女学生風のその少女は、敵軍の偵察活動を行なっていて捕まったのであった。少女は毅然とした態度で敵兵に臨んで小隊長の怒りを買ひ、凌辱される寸前に自死を遂げる。武誠は少女の最期を目にして心打たれ、夜には一人で無人島に引き返し、少女の遺骸を埋めて葬る。心には復讐を誓っていた。

3日後、武誠は敵兵から翌日また舟を出すようにとの指示を受け、夜にこっそり舟に細工をする。夜が明け、多くの敵兵を乗せた武誠の舟はどんどん沖へと進んで行く。舟が徐々に沈んでいっていることに敵兵たちが気づき、武誠の仕業だと悟った小隊長は武誠を銃殺する。武誠が最期の瞬間に思い浮かべたのは、例の少女の笑顔であった。武誠と日本兵たちもろともに舟が沈んだ後、海は静けさを取り戻し、島々だけが陽の光に照らされていた。

原文は4000字弱と短く、読者を迷わす描写も複雑な構文もなく、淡々と叙事的に書かれた作品となっている。この「荒島上的故事」については中国本国には専論はないが、ある程度まとまった評としては、以下がある。

抗戦期間、楊振声は大後方に身を置いていたが、心は民族解放戦争の前線にあった。偉大な反侵略戦争の内側から、彼は真に中国の前途と中国人民の力を見付けたのである。彼は溢れんばかりの情熱をペン先に集め、高らかに悲壮な愛国主義讃歌を一曲また一曲と作り上げた。例えば1943年創作の「荒島上的故事」は「済南城上」中の人物よりも更に偉大で感動的な民族英雄の姿を描き出し、楊振声の現実主義的な創作の新たな発展を示している。小説において戦闘中に捕虜となった女学生は、敵の軍事法廷で中国人民の侵略者とは最後まで血戦を遂げるといふ英雄的な気概を充分に見せつけている。そしてその壮烈な死は、殺すことはできても辱めることはできない中華の娘の崇高な民族の気骨を体現した。彼女に感化され、軟弱な漁師武誠は舟底に穴を開け、日本軍とともに亡びた。この小説は当時の国民党統治区における小説創作では、かなり良い作品である。¹³⁾

実は「荒島上的故事」中に「日本」の語はない。あくまでも「敵」「敵兵」という語が確認できるだけである。無論、この評が明らかにしているように、作品が発表された1943年という年が抗日戦争末期であることから、「敵」が何を指しているかは間違えようがない。とりわけ敵の小隊長は不正確な中国語を話し、その外見を「鼻の下に歯ブラシを1本横に貼った〔ような髭を蓄えている：杉村注〕」と描写される好色な男であり、中華人民共和国建国以後、現在に至るまで量産されている抗日映画・抗日ドラマにはほぼ必ず登場するチョビ髭で好色な日本兵の原型とも言える醜悪な姿で残虐な「敵」を具現化している。

楊にとって日本軍・日本兵というのは、単なる想像の中の「敵」ではない。「私が故郷の山東省蓬萊の小学校や中学校で学んでいた頃に出くわした出来事」として、楊は以下のように書いている。

黄昏時、私が城内を出ようとちょうど城門楼に近付いた時、耳元でボンという爆発音がして、驚いた私は跳び上がった。気を落ち着けて見てみると、八の字髭の水兵服を着た日本人がちょうど、楼の上の鳩を撃ったところだった。一発では当たらず、その男はまたも二発目を撃とうとしたが、鳩の群れは既にばたばたと飛び去ってしまった。男はぶつぶつと私のわからない言葉で罵ると、銃を肩に乗せ、大股でどすどすと城内へ歩み去って行った。まるで誰もいない所に行くかのようにだった！私は大きく息を喘がせると城内から出た。「ああ！あれは日本軍の船じゃないか」その船は武力を誇り威勢をひけらかすように私たちの海岸に接近していた。あたかもならず者が一人、首の上に乗っかり、更に頭上で得意気に歯を剥き出しにしてニタニタと笑っているかのようだ！¹⁴⁾

楊が少年期に目撃した鳩を撃つ水兵服の男のエピソードは、どちらかと言えば他愛のない、取り立てて言うほどのこともないものに見える。楊がそれを克明に憶えているのは、その後、北京

で五四運動に直接参与したからであった。1919年5月4日、山東半島への日本の帝国主義的侵入に対する民族的抗議運動として、当時北京大学に在学中であった楊はデモ行進・官邸焼き討ちに関わり逮捕されている。山東半島における日本の諸權益が同年のパリ講和会議で承認されたことは、当時の中華民国全体にとって屈辱的なことであるのは言を俟たないが、山東出身の楊にとってはより深刻な意味があった。当然のことながら日本とは即ち故郷の篡奪者に他ならず、少年期のごく小さなエピソードとも言える前掲の回想も、威容を誇る軍艦(=軍事力)を後ろ盾に鳩(=弱者たる中国人民)を無闇に脅かす水兵(=日本兵)として楊の脳裡に刻まれていたに違いない。

しかし、か弱い鳩はただ逃げ去るばかりではなかったのである。

3. 自死する少女——生の否定から肯定へ

「荒島上的故事」はごく単純化してまとめれば、前節で見た評の通り抗日をテーマとした、愛国心・民族意識を鼓舞する作品と言える。前半部の少女の勇敢な自死が、漁師の武誠の愛国心を喚起し、後半の武誠による日本兵を巻き込んだ舟の沈没に直接的に結び付いている。本節では、この自死する少女に焦点を当て考えてみたい。

楊作品における自死する少女は、「荒島上的故事」の女学生が初めてではない。1. で述べたように、1920年発表の「貞女」のラストシーンで主人公の少女が縊死している。しかしながら、成婚前に婚約者を喪った少女が冥婚という形で嫁ぎ、婚家で自死を選んだ時、その死は婚約者の男に殉じて節を守った女性、『明史』や『清史稿』などの史書の中で長く表彰され続けてきた「節婦烈女」の文脈に回収されてしまう。中国の伝統的封建的価値観に基づけば、女性は婚約者や夫に殉じて死ぬことは賛美・表彰の対象であり、門や碑を建てて行為を褒め称えるという「旌表」を請うことが可能であったのだ。歴史的には軽率な殉死を禁じた清の雍正帝のような為政者もいたが、中華民国期の1914年、総統袁世凱は「褒揚条例」を公布し、「貞節を固く守り、世の模範とすることのできる女性」を「褒揚」の対象とし、儒教倫理の維持を図った。辛亥革命以降も女性のみならず守節が求められていたのである¹⁵⁾。楊の「貞女」はそうした風潮に対して厳しい批判の眼差しを向けたものではあったが、作中の少女の自死が「生」に背を向けた悲しい選択として描かれていることは否定できない。

元来、自死は肯定的な意味が付与されて描かれるものではない。中国現代文学作品におけるヒロインの自死を概観しても、例えば「五四作家」の代表と見なされる巴金(1904-2005)の長篇『家』(1931)では、名家である高一族の末息子覚慧と恋愛関係にあった小間使い鳴鳳が老人の妾として売られることを苦に入水自殺をしており、「多くのセンチメンタルな読者にとって、鳴鳳の死は現代中国小説で最も感動的な一幕」¹⁶⁾と評されている。彼女の死については、覚慧を愛したまま入水したことで「能動的な行為」¹⁷⁾とする読みもあるが、覚慧が「いや、僕だけじゃない、僕たちのこの家庭が、この社会が全て殺人犯なんだ！」¹⁸⁾と言うように、鳴鳳を封建社会の気の毒な犠牲者と見なすのが一般的である。その点においては「貞女」と通底している。また、1940年代のベストセラー作家無名氏(1917-2002)の長篇『北極風情画』(1943)は、東北抗日軍の韓国人将校が戦地に赴いたことで、残された恋人であるポーランド人ヒロインのアウレリアが悲嘆のあまり自殺をするくだりをドラマチックに描いた。アウレリアの自死は、彼女が母と二人きりで

支え合って生きてきたことや彼女自身によって語られる祖国や民族の復興に思いを致せば、恋愛に比重を置き過ぎたゆえ、小我にとらわれたゆえと理解でき、主人公の青年将校の革命的使命とは対照的である。また、無名氏と同時期に活躍した徐訏（1908-1980）の「幻覚」は、結婚の約束をした男が逃げたため、ヒロイン地美が精神に異常を来し、身を寄せていた庵で失火し亡くなっている。自死であると明確に示されている訳ではないが、「失恋によって頭がおかしくなった尼僧が放火して、自分もそれによって死ぬ」という世間の見方が作品の底に存在しており、それを覆し得る要素は見当たらない¹⁹⁾。このようにヒロインの自死は、伝統的封建社会の価値観を内面化しているゆえに死を選ばざるを得なかった気の毒なものか、恋愛の成就がかなわなかったために悲しく惨めな状況からの逃避として描かれてきた。

翻って「荒島上的故事」における少女の日本人（と思しき）小隊長への対応と自死のシーンを見てみよう。

「オマエ、ドコ人？」

「中華民國の国民だ」その女子は右手で額の髪を右に払い、顔を上げて答えた。

小隊長は鼻の下の歯ブラシのような髭を反り上げ、また尋ねた。

「オマエ、名前、何？」

「中国の娘だ」（中略）

「オマエ、ココデ何シテタ？」小隊長は黒い歯ブラシを整えつつ尋ねた。

「敵の行動を偵察し、島の住民たちを目覚めさせようとしていた」

「オマエタチ、全部デ何人？」

「四億五千万だ」（中略）

「オマエ、キレイ」言いながら小隊長は手を伸ばしてその女子の左頬を撫でようとした。その時、彼女の両頬は既に怒りのあまり真っ赤に燃えていた。パンという音が響き、その女子の右手が既に小隊長の左頬をはたき付けていた。

小隊長は、手でその熱を発する頬を押さえつつ後ろに二歩下がった。両目は凶暴な光を発しており、兵士にその女子の衣服を剥ぎ取るように命じた。敵兵は銃剣の先を前に向け取り囲んだが、不意にこの時、その女子は敵の銃剣の先をめがけて突進し、敵の武器と方法を利用して腹を切って自殺したのだった！〔168-169頁〕

この段において少女は、「中華民國の国民だ」「中国の娘だ」と自らを規定している。即ち個人ではなく、愛国的民族意識を全面に出し、たった一人であっても敵兵に対立拮抗し得る存在であることを印象付けている。そして、触れられるより先に小隊長を平手打ちして強い拒絶を示し、小隊長の邪な意図を察すると凌辱を受ける前に自死を遂げている。それも敵兵の銃剣の切先に突進するという壮絶な方法であった。

この少女の姿勢は、作中に登場してから自死するまでの間、終始一貫している。敵兵の言いなりはならないという激しい抵抗の姿勢である。「貞女」のヒロインの自死が痛ましいまでに消極的なものであるのとは対比的に、また或いは「家」の鳴鳳や無名氏・徐訏作品のヒロインたちとは異なり、敵兵の凌辱を絶対に許さないための自死、勇敢な選択であったと言えるだろう。それ

は生きていることに意義を見出せないという生の否定ではなく、自死を選んだからといって死の肯定でもなく、あくまでも自民族の生を肯定するための唯一の道であった。

4. 京劇「打漁殺家」——抗日のメルクマール

武誠は目の前で繰り上げられた女子学生の壮烈な自死に衝撃を受け、子供時代に観た芝居を思い出した。

彼は、本当に思いもしなかった。一人の徒手空拳の女子が、あんなにも威厳があって勇ましくなり得るとは。あの平手打ちの音がどれほど響いたことか、どれほど痛快だったことか！それは彼に一種の驚きと羨望を呼び起こした。あの女子の死のあっさりとしたすがすがしさは、彼に更なる崇拜の念を抱かせた。彼はこれまで何かを崇拜したことなどなかった。ただ媽祖廟の縁日で芝居の「打漁殺家」を観た後にも、あの蕭恩とかいう人物とその娘の桂英に対して、そのように感じたことは憶えている。その頃彼は、自分も彼らのようになりたい、或いは彼らと一緒に復讐したい、彼らと一緒に逃げたいと思っていたのだ。それは彼がまだ子供だった時のことで、今ではとっくに忘れていた。しかし、何故か、あの女子は武誠にそのことを思い出させた。今この時、彼はまたもその時と同じように感じたからである。
〔169-170頁〕

武誠が思い出した芝居の「打漁殺家」とは京劇の有名な演目であり、『水滸伝』に材を取る作者不詳の作品である。歴史的には今で言うところの京劇が誕生する以前から、漢劇、秦腔、山東梆子などの地方劇や語り物でも演じられていたようである²⁰⁾。楊振声は1928年の講演「新文学的将来（新文学の将来）」において、「しかし旧劇は近年来、かなりの進歩が見られます。皆さん、旧劇など何の価値もないなどとゆめ思われますな。幾つかの劇、例えば『打漁殺家』、『白蛇伝』、『打嚴嵩』、『奇双会』等はどれも良いものです²¹⁾」と言及しており、「荒島上の故事」執筆以前から「打漁殺家」を評価していることが確認できる。

「打漁殺家」の概要は以下の通りである。梁山泊の生き残りである豪傑阮小二は、蕭恩と名を変え、今では娘桂英と漁業で口を糊している。土豪の丁員外に不当な漁税を要求され、蕭恩は役所に訴えるも、丁と結託していた役人から逆に笞刑を受けてしまう。義憤に駆られた蕭恩は桂英と丁家に乗込み、丁一族を皆殺しにする²²⁾。この概要からわかる通り、弱者が強者を打倒する、勧善懲悪がテーマの内容である。「こうした演目は直接間接に民主主義と愛国主義的思想を表現しており、ある程度、人民大衆の反帝国・反封建的な要求と願望を反映している。たとえ『打漁殺家』（中略）などの伝統的演目であっても、周信芳による再創造を経て、劇中の主人公はより一層気骨に溢れ凛然とした気風を備え、まばゆいほどの輝きを包含することになったのだ²³⁾」と紹介されるように、民国期以降の中国の時代的社会情勢に沿った演目として人気があった。

武誠が「打漁殺家」の主人公の蕭恩と娘の桂英に対して感じた「彼らのようになりたい」「彼らと一緒に復讐したい」という思いを、自死した少女に対しても感じていることから、単純に少女を被圧迫民の代表として見なしているとも読めるが、このくだりには明確に抗日の指標を見る

ことができる。

1938年7月7日、この日、中国共産党の根拠地であった延安において、戯劇節〔芝居デー〕として抗日戦争一周年と共産党建党17周年を祝う催しが行われている。毛沢東を始めとした幹部の前で、魯迅芸術学院によって上演されたのは抗日をテーマとした新編京劇の「松花江上」であった。この演目は当時の満洲の松花江一帯を舞台とし、老漁師が日本の侵略に耐えかね、民衆を率いて武器を手にして敵に挑むという、最終的には人民による抗日を讃えるものになっているが、「王震之が『打漁殺家』の芝居の構造に基づいて抗日の内容を加えて編み直したものであった」²⁴⁾。老漁師の娘の名は「打漁殺家」と同じ桂英であり、初演の際に桂英を演じたのは、後の毛沢東夫人江青であった。『中国京劇史』は次のように述べる。

「松花江」は古い瓶に新しい酒を入れる〔伝統的な形式に新しい内容を盛るの意：杉村注〕という形式で延安の京劇の舞台に現れた。この作品には各種の不十分な点はあったが、既に現実の生活から出発せんと努めており、芸術形式と表現される生活の内容との調和に気を配っている。これは延安の京劇改革における一種の試みと言わないわけにはいかないだろう。抗戦一周年の記念の夕べで上演された「松花江」はかなりの成功を収め、党中央や辺区政府の幹部たち、八路軍の広範な指揮官・戦闘員および群衆の熱烈な歓迎を受けたのであった。後にこの劇は、戦闘部隊、役所、学校などで絶えず上演を行なうようにもなった。中国共産党第6期党大会中央委員会第6回全体会議において、この劇は更に毛沢東、朱徳、周恩来および全体会議に参加した中央委員たちのために特別に上演された。²⁵⁾

毛沢東の前で、更には5年に一度しか開催されない中国共産党の中央委員会全体会議で上演されたという事実から、「松花江上」が中国共産党のお墨付きの抗日演目になったことを指摘できるだろう。

このような「打漁殺家」から「松花江上」への改編、「松花江上」の中国共産党公認抗日京劇化のプロセス²⁶⁾に鑑みれば、武誠が「打漁殺家」を想起したシーンは抗日のメタメッセージであることは間違いない。そもそも日本兵であることは言を俟たない「敵兵」が登場していることで、強い抗日メッセージが発せられていることは確かだが、楊振声が早くから高評価を公言していた「打漁殺家」をも織り込むことによって、最後には人民が勝利する、人民の敵たる悪は亡びるといふ、強い抗日色を二重三重に打ち出したのである。漁師の武誠の目には、名も知らぬ少女の姿に英雄豪傑であった蕭恩と娘の桂英が投影され、少女は小英雄として武誠によって弔われたのであった。

5. 海を照らすもの——月と太陽

女学生の悲壮ながらも勇敢な最期は、武誠の意識を大きく変えた。「敵に対して、彼は元々言い出し得ぬ憎悪の念を隠し持っていたが、しかし敵を恐れる気持ちが彼を臆病者に変えてしまい、臆病な気持ちが彼を恥知らずに変えてしまっていたのだ！」〔169頁〕ここには抗日活動をしていた女学生の勇敢さと、敵の言いなりになって彼らの水手に甘んじていた武誠の怯懦との鮮烈な対

比が示されている。

その対比に打ちのめされた武誠は、家で老いた両親と妹が自分の帰りを待っていることを知りながら海辺の岩の上で一人考え込んでいたが、「彼はこの時、心の内がかなりはっきりとした。おぼろな月の光が深い闇を照らしており、彼は自分のその澄んだ心が自分にやらせたがっていることを見つけたのだ」〔170頁〕。やがて舟で無人島に引き返し、武誠は女学生の遺骸のもとへ行く。「ほんやりとした月の光が岩や砂浜を照らしており、わずかだが微かに反射していた。一切の光が彼女のその雪のように白い顔に集中的に集まり、一種の静粛さと沈黙の内には神秘的な荘厳さが潜んでいた」〔170-171頁〕。夜の月の光は闇や死とともに描かれている。

武誠は穴を掘り、そこに少女の遺骸を横たえる。

彼は躊躇した。しかし、彼は彼女を埋葬しなければならないのだ。そこで彼は土を一掴みかけたが、月の光に浸かっている雪のように白く輝く顔を見ると、どうしても彼女の上に直接土をかけるのに忍びなかった。彼はしばらく考えると、その周辺で松やモチノキの枝を折って来ると、彼女の顔をそれらで覆い、それから心を鬼にして遺骸全てを埋めたのだった。〔171頁〕

ここでも月の光は死とともにあり、少女の遺骸を照らしている。もう二度と息を吹き返すことのない、荘厳なまでの絶対的な死として、少女の遺骸は雪のように白く、月はそれを照らしていた。

楊振声は「荒島上的故事」発表の6年前、短篇「抛錨」を発表している。この作品は漁村における私刑をテーマとしており、ラストで漁師の穆三が海に沈められるさまが描かれる。

彼らは何二姑を入れていた麻袋に穆三を詰め込み、石を一つ括り付けた。四人の男が麻袋を舟に担ぎ込む。舟が沖まで出ると、男たちはそれと声を上げ、ドボンと麻袋を海中に投げ入れた。海に大波が沸き上がり、続いて波紋が幾重にも外に向かって広がり、消えていく。とうとう波紋がすっかり消えてしまうと、海は何事もなかったかのように元の静けさを取り戻したのだった！

皆が去った後、硬い岩のように海岸に座り込み、呆然と海を見ている何二姑を、西に傾いた月が照らしていた。²⁷⁾

獵師穆三は弱者を救うために俠気を発揮するのだが、それが漁村の安定したバランスを損なうものだとされ、封建社会の遺制である私刑に遭って死ぬ。一部始終を照らす月は、この作品においても理不尽で苛酷な封建社会を見つめる存在となっている。即ち、「荒島上的故事」や「抛錨」において月光は夜の明けぬ時代、弱小な人民が抗うことのできない前近代の象徴となっていると言えるのではないだろうか。

しかし、夜明けは近かった。武誠はためらう心を押し殺し、彼女を埋葬すると「俺が君の仇を打つ」〔171頁〕と誓う。

この時、傾いた月はまさに沈まんとしており、海面にはきらきらとした輝きが既に一筋の銀灰色の平面となっている。それは東の空の発した白い光、空がまさに明けようとしていた。

〔171-172頁〕

闇や死を包み込むかのようにであった月が沈み、陽が昇らんとする時、武誠も怯懦な自己と決別する。朝が来て覚醒するのである。

更に3日後の晩、「下弦の月は尚も浜辺を照らしていたが、月は一層痩せ細っており、夜の気配も一層おぼろになっていた」〔172頁〕。翌日、舟を出すようにとの命令を受けた武誠は舟に細工をする。理不尽さや前近代の象徴である月は、一層その存在感を薄れさせていつているのがはっきり示される。

翌日、「太陽が昇ると、海面には幾千幾万もの金の星が光り輝いているようだった。武誠はその強烈な光線によって目覚めた」〔172頁〕。武誠は舟に敵兵を積み沖へと漕ぎ出して行く。次第に武誠の施した細工によって、舟は漏水し、沈み始める。武誠の仕業だと気付いた小隊長は震えながら武誠を難詰し、物語は一気にラストへと向かって行く。

「オマエ、オマエ回シ者ダナ！」小隊長は銃を取り出し、武誠に照準を合わせた。

「俺は中華民國の国民だ」武誠はあの少女を思い出しつつ答えた。

「オマエタチ、全部デ何人？」

「四億五千万だ」

その小隊長の銃がバンと鳴った。武誠は胸に激痛を覚え、手から櫓が落ちた。後方へ倒れていくその刹那、彼は自分の年老いた両親と幼い妹が泣いているのが見えた。そしてまた、あの寂しい墓に眠る少女が笑っているのが見えた。その笑いととも、彼はぼんやりとあの小さな無人島へと飛んで行ったのだった。(中略)

海の上には大きな渦巻が表れ、続いて何人かの敵兵が水面でもがいていたが、それとて海上でのこと、岸からははるか遠く離れている。続いて海上に幾つかの小さい渦巻が表れると、海は限りない静けさを取り戻した。ただ延々と続く島嶼だけが永遠に陽の光に浸かっているかのようだった。〔173頁〕

武誠の小隊長への毅然とした対応は、殺された少女の言ったことを完全になぞるかのようである。その結果、武誠は銃殺されるが、死の直前に脳裏に浮かんだのは、例の少女の実際には見たことなどない笑顔であった。この少女の笑顔は武誠の超自我とも言え、最期に武誠が自分の行いを誇りに思い、自らを認めた瞬間となったと言えるだろう。この瞬間に武誠は、子供の頃に観て憧れた芝居の英雄や勇敢な女学生に自身を見事に擬したことで、残された家族が悲しむにしても、何に対しても恥じることはない生を生ききったことを確認したのである。

海に人や舟が沈みゆき、渦巻や波紋が表れ、それらが消えた後は海が静けさを取り戻すという前掲の描写は、「抛錨」と共通するラストとなっている。しかし「抛錨」で一部始終を照らしていたのが月であったのに対し、「荒島上の故事」で武誠の舟の上で行われた全てを照らしていたのは、「陽の光」だった。この「幾千幾万もの金の星が光り輝いている」かのよう海上を照ら

す太陽の光明は、封建的な前近代や死や闇とともにあった月に対して、人民が勝利を勝ち取るべき栄光として描かれていると見て良いだろう。そして、その栄光の陽の光こそが「永遠」の存在として輝き続けるのである。

6. 結

楊振声は「貞女」において、既に亡い婚約者に嫁いだことで自死を選ばざるを得なかった少女を悼んだ。筆致は淡然としているが、楊が作品に籠めた主張は史書に見られる伝統的な貞女表彰とは真正面から対立するものであった。それは、少女を自死に追い込む封建的道德観への激しい批判の矢である。

「荒島上的故事」においても、少女の自死はそれ自体はやはり痛ましいものである。しかも彼女の自死は、武誠の死をも招いている。しかしながら彼ら2人の死は、楊作品においては讃えられるべきもの、光とともにあらねばならないものとなっている。死それ自体を讃美するのではなく、追い詰められて極限の状態にある弱者の究極の選択として、また日本軍兵士への激しい抵抗として、輝かしい意味が付与されたのである。ラストの陽の光がそれを雄弁に語っているだろう。

楊は最早、「極力人民の間の苦しみを描写しようと努めた」だけではない。苦しみの中で立ち上がり闘う人民が、時代や社会の主人公となっていくさまに次々と光を当てた。また、楊作品において大きく変容したのは自死に托された意味だけに止まらない。「貞女」において一切口を開くことのなかった少女は、「荒島上的故事」においては凜然と自らが何者かを告げる少女へと姿を変え、「抛錨」において封建的価値観に縛られたままの猟師たちが、「荒島上的故事」においては怯懦を捨て去り、敢然と敵へ立ち向かっていく青年漁師へと姿を変えた。これは楊の作風の変化であると同時に、楊における労働者観・人民観の大きな変化でもあったと言えるだろう。

残された課題はジェンダーの問題である。少女の自死のシーンには、被圧迫民族ゆえの屈辱に加えて、未遂ではあるが女性ゆえの最大の屈辱も描かれており、明確に戦争とジェンダーの問題が示されている。しかし、楊はその点については深入りせず、武誠の少女への思いも同じ民族としての共感を基底とした小英雄への憧れと崇拜である。個人的な交流がなかったことで、武誠において少女は同志愛を超えて信仰の対象ようになっており、物語は民族神話化しているようにも見える。楊の作品には所謂恋愛ものは一作もないのであるが、単に恋愛をテーマに据えなかっただけでなく、恋愛の要素自体ほとんど描き込まれない。それは中国文学伝統の「恋愛軽視」ではなく、そこには楊の別の問題意識があるようにも思われるのだが、本稿とはテーマを異にするため、稿を改めて論じたい。

楊振声の作品は、癖の強くない叙事的とも言える文体の背後で、個々の作品に籠められた時代的な意義や社会的な問題が今も色褪せることなくメッセージを発し続けている。

注

- 1) 楊振声は山東省蓬萊出身、字は金甫、或いは今甫。1919年、北京大学在学時に新潮社に参加、「漁家」、「一個兵的家」、「貞女」等の小説を発表。米国ハーバード大学、コロンビア大学に留学、教育心理学等を学んだ。帰国後、北京大学、武昌大学、中山大学、燕京大学、清華大学等の教授を歴任、清華大学では文学院長、教務長等を務めた。1932年、国立青島大学校長に就任。抗日戦争勃発後は、

- 長沙臨時大学教授、西南聯合大学叙永分校主任及び教授などを歴任、抗戦勝利後は北京大学教授兼中文系主任となり、建国後は北京市文聯創作部部長に就任。1952年から東北人民大学教授となるが、1956年に北京で没した。代表作は中篇小説『玉君』。孫昌熙・張華「楊振声著作系年簡表」（孫昌熙・張華編選『楊振声選集』人民文学出版社、1987年）を参照。
- 2) 蕭乾「我的啓蒙老師楊振声（代序）」、注1前掲書、7頁。
 - 3) 中野徹「国と省のはざままで——国立青島大学と楊振声」（『野草百号記念号 中華文藝の饗宴』研文出版、2018年所収）など。
 - 4) 『楊振声研究資料選編』（李宗剛・謝慧聰選編、山東人民出版社、2016年）には1925年時点の『玉君』評として、吳宓「評楊振声『玉君』」、尚鉞「読『玉君』之後」、培堯「読『玉君』後」など15篇を収録している。
 - 5) 魯迅『『中国新文学大系』小説二集序』、『魯迅全集』第六卷、人民文学出版社、1996年、239頁。初出は『『中国新文学大系』小説二集』、上海良友圖書出版公司、1935年。
 - 6) 楊振声「貞女」、『新潮』第2巻第5号、1920年9月。「貞女」とは婚約者を喪っても他家には嫁がず、婚約者の家で節を守る女性の謂いであり、古代においては表彰の対象であった。詳しくは拙論「楊振声と「五四」 楊振声の「五四」、『野草』（中国文芸研究会機関誌）第94号、2014年8月、41-60頁を参照されたい。
 - 7) 楊振声「阿蘭の母親」は『現代評論』第3巻第68期（1926年3月27日）に、「済南城上」は『現代評論』第7巻第184期（1928年6月16日）に掲載された。どちらも三一八事件と済南事件の発生後、時を置かずして執筆された。詳しくは拙論「愛よりも情よりも——楊振声「阿蘭の母親」から「済南城上」へ」、『言語文化論叢』（金沢大学国際基幹教育院外国語教育系紀要）第23号、2019年3月、129-148頁を参照されたい。
 - 8) 詳しくは宮尾正樹「楊振声と「玉君」」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第7号、1988年、21-37頁を参照されたい。
 - 9) 本論では注1前掲書所収の「荒島上的故事」をテキストとし、引用には亀甲括弧によってページ数を示し、拙訳を付す。初出未確認。
 - 10) 「国立西南聯合大学三十二年度教員名冊」（北京大学・清華大学・南開大学・雲南師範大学編『国立西南聯合大学史料』四、教職員巻、雲南教育出版社、134頁）に楊の名がある。民国32（1943）年当時、楊は55歳、中国文学系の教員の中では最年長であった。
 - 11) 李広田は山東省鄒平出身、北京大学外文系卒業。楊振声とは同じ山東出身でもあり、大学の同窓でもある。李は1940年に西南聯合大学四川叙永分校の教員となったが、李の名は注10前掲書の民国29（1940）年、30（1941）年の名簿には見出せず、31（1942）年の国文系教員名簿に確認できる。
 - 12) 『世界学生』については、王景山「李広田和『世界文芸季刊』」、『新文学史料』1993年第1期、207-213頁を参照した。王景山は西南聯合大学外文系出身（1943年入学）、「大一国文」の科目で楊振声の学生であった。「大一国文」とは大学一年次の全学必修の国文科目を指し、楊を中心に西南聯合大学中国文学系教員によって教科書も編纂されていた。詳しくは今泉秀人「教授作家——西南聯合大学の沈從文」、『野草』（中国文芸研究会機関誌）第106・107号、2021年、91-118頁を参照されたい。
 - 13) 孫昌熙・張華「楊振声和他的創作」、注1孫昌熙・張華前掲書、363-364頁。楊振声の作品全般に対して批評したものとなっている。
 - 14) 楊振声「回憶五四」、注1孫昌熙・張華編前掲書、246頁。初出は『人民文学』第55期、1954年5月。初出未確認。
 - 15) 明清期の節婦烈女表彰に関しては合山究著『明清時代の女性と文学』、汲古書院、2006年と陳青鳳「清朝の婦女旌表制度について——節婦・烈女を中心に」、『九州大学東洋史論集』第16号、1988年、101-132頁を、民国期の褒揚条例に関しては高橋保「五四新文化運動期の中国における婚姻制度と女性の地位」、『国際文化研究所紀要』第2巻、城西大学、1996年、25-48頁を参照した。
 - 16) 夏志清原著、劉紹銘編訳『中国現代小説史』、友聯出版社有限公司、1979年、215頁。
 - 17) 河村昌子「巴金「家」論——鳴鳳の物語」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第13号、1994年、33-49頁。
 - 18) 巴金「家」、『巴金全集』第一巻、人民文学出版社、1986年、277頁。注17前掲論文も鳴鳳の死を能動的なものとしつつ、そのメッセージは覚慧に伝わらなかったとしている。
 - 19) 無名氏「北極風情画」については拙論「無名氏「北極風情画」考——「通俗戦略」を超えて」、『野草』（中国文芸研究会機関誌）第96号、2015年8月、17-36頁を、徐訏「幻覚」については拙論「徐訏「幻

覚」試論——無名氏作品との関わりで見える感傷に浸る男たち・葬り去られる女たち——」、『日本女子大学文学部紀要』第71号、2022年、95-106頁を参照されたい。

- 20) 京劇および山東梆子については、北京市芸術研究所・上海芸術研究所組織編著『中国京劇史』上巻・中巻、中国戯劇出版社、1999年を参照した。尚、漢劇は湖北省の地方旧劇、秦腔は陝西省、山東梆子は山東省を中心とした一帯の歌による語り物を指す。
- 21) 楊振声「新文学的将来」、注1前掲書、276頁。初出は1928年12月12日、『清華周刊・文芸増刊』。初出未確認。
- 22) 「打漁殺家」の概要は中塚亮による解説（1938年6月26日昼「北京・華樂戲院 戲単」、中里見敬・松浦恒雄編『濱文庫戲単図録 中国芝居番付コレクション』、花書院、2021年所収）に基づいた。尚、蕭恩については、阮小二ではなく、弟の阮小五、阮小七であるとする記事もある。
- 23) 注20前掲書、中巻、679頁。文中の「周信芳」とは1895-1975の京劇の名優、芸名麒麟童。
- 24) 注20前掲書、中巻、931頁。文中の「王震之」とは1915-1957の共産党員、1938年当時、延安の魯迅芸術学院戯劇系の教員であった。
- 25) 同注24。多くの資料は劇名を「松花江上」としているが、『中国京劇史』では「松花江」としている。引用は原文に則った。また、中国共産党第6期党大会中央委員会第6回全体会議は1938年9月29日から11月6日にかけて、延安橋児溝にて開催された。
- 26) 「打漁殺家」の「松花江上」への改編および公認抗日京劇化については、樋泉克夫「毛沢東と京劇：《打漁殺家》と《松花江上》とをめぐって」、『愛知県立大学外国語学部紀要 地域研究・国際学編』第36号、2004年、179-201頁を参照した。
- 27) 楊振声「抛錨」、注1孫昌熙・張華前掲書、165-166頁。『文学雑誌』月刊創刊号、1937年5月。初出未確認。詳しくは拙論「楊振声「抛錨」・石華父『海葬』・柯靈『海誓』をめぐって——恋愛と復讐の変奏」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第32号、2013年4月、17-33頁を参照されたい。

【附記】

本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた基盤研究（C）「美女と戦争——抗戦期中国の通俗小説に見る民衆の嗜好」（課題番号：20K00364）、同じく基盤研究（C）「教育都市・青島をめぐる文化往来——1920～30年代中国のアイデンティティ構築」（課題番号：21K K00333、研究代表者：早稲田大学 中村みどり）による研究成果の一部である。